



ニヒリスティックな性格を思わせる横顔が、短い描写のなかに、くつきりとあらわされているのである。北壁にとりつくというのに、夜ごと山麓のバーで五、六杯も大ジョッキを空にし、四十本も煙草をすい、たれかまわずジュークボックスにコインを入れさせたりして、しかも、いよいよよとなると途端にしゃっきりする。配管工で苦勞しきったこの一流クライマーの風か変わった行動を、ペイテイの筆は実によく捉えている。そしてこのペイテイ自身、ウィーランスの一面に惹かれていた様子がある。この文章のなかにうかがえるのである。

ウォードの「山岳文学の今昔」には、一世紀前にレスリー・ステイヴンが山の文学について述べた一節が紹介されているが、その要点の一つは、長々しい山の讚美、山の神聖化もほどほどにしないとラスキンならともかく、その物まねでは笑いのものになるのがオチだということ、要点の第二は、肩ひじ張った表現を好まない英国人らしく、危機にのぞんで冗談の一つも出せるといった、いわゆるセンス・オブ・ユーモアが必要だということである。この二つの点でペイテイとステイヴンとは、一世紀の隔たりを越えて、なお共通するものがあると、ウォードはいう。

独自の表現力、とくに男らしい深きよさに富む筆が備わっていると同時に、ユーモアの点では、むしろ大先輩のステイヴンをしるぐ才能を持っていたとさえ思われる。彼の遺著には登攀記とともに「サタイア」(風刺)と題して五つの文章が収録されているし、また作詩の才能にも富んでいただけに、パロディ風な十八篇も含まれている。スコットランド生まれなので、イングリッシュ的なものへの反撥も強いが、アルバイン・クラブなどへの皮肉な唄などもふくめて、なかなか辛らつな風刺なのだが、悪意を感じさせないらしく、山仲間の間で愛唱されているという。

私自身の読後感として、ここに一つ記しておきたいのは、著者ペイテイがしばしば、山登りのアマとプロの問題を、真正面からではないが、ユーモアに満ちた筆致で、また風刺を込めた表現で取りあつかっている点である。著者自身がBBCテレビジョンのために、ポニントンやドーガル・ヘストンなどの名クライマーたちとともに海辺にそびえる岩塔登攀を実演したので、アマ・プロ批判の対象になったこともあって、この問題に関心を寄せているのかとも思われる。この著者のことだから、正面切って論陣を張るといいうのではなく、アマ・プロの境界の微妙さをユーモラスに衝いたり、「プロフ

エシヨナルズ」と題して、この問題を戯画化してみせてくれる。また、未来図の一つとして、「アルバイン・クラブを救え」と十万ポンドの募金運動がはじまるといった場面も描いて見せる。「登山の黄金時代を記憶する登山家は必ずしもハント卿が要望する協力」であるが、募金の理由は、有力選手がプロに転向するので、伝統あるクラブの人氣が低下の一方だからというのである。プロを認めたテニスのウインブルドンを連想させるような書きぶりが微笑を誘うが、一つの問題が存在していることを、読むものに感じさせる。プロといえ、近ごろの山の本にも、たとえばクリス・ポニントンのように、アドヴェンチュア・ジャーナリストの旗じるしを掲げる人たちの著作が目立ってきた。新しい著書のためには、目新しいアドヴェンチュアが必要となり、企画される、スポンサーを得て実行に移される。それが完了するや、時を移さずベスト・セラーを目指して出版という段取りになる。プロを名乗るほどの登山家だから、技量は抜群、登攀ルートは Dire'sissima。それも冬季を選ぶといった具合に、より困難を克服する方向へと、次第にエスカレートするのは、当然の成行きといえよう。こういうサイクルに追いつけるアマチュアは少ないだろうから、人目を惹くアドヴェンチュア・ブッ

### 氷雪の極点へ

——一九七八年、海外の記録——

クスには、プロの筆になるものが多くなるに違いない。問題はその質、内容ということになるが、これに対処するには、読む側のきびしい評価が必要であること、今さらいうまでもあるまい。

やはりこの夏、読んだ本のなかにヤニック・セニエールの『希望のアルピニズム』(近藤等訳、森林書房 一九七八年刊)がある。ガイドと登山用具の開発に従事するセニエールは、近藤氏によって「現代のフランス登山界を代表するクライマーであるばかりでなく世界最強のアルピニストの一人である」とされている。事実、この夏ベッターブルと二人だけで、八〇四七メートルのプロード・ピークをわずか三日間で登頂して私

たちを驚かせた。このセニエールの本は、安楽椅子の読者にも大変すがすがしい読後感を味わせてくれた。恐るべきクライミングをやっている三十六歳の果敢なガイドのどこに惹きつけられるのだろうか、自問しながら読んだのだが、この本の末尾の一節が、すっきりとそれに答えてくれたように思う。

「しかし、ヒマラヤのこうした並外れた征服と平行して、アルプスはふたたび荒々しい自然な山に還らなければならぬ。そして人間は、彼らが大切にするプレイグラウンドで遊ぶことの好きな子供に戻らなければならぬ。」

欧州アルプス、ヒマラヤ、北極点を問わず、地球は作られるためにある記録への挑戦の場としても存在理由があるようで、経験の蓄積はスピディな社会変革を反映して、内容も高度化、多岐に分かれてくるが、これも歴史のすう勢というところ。ここに目立ったものだけ、記録を追って集めてみた。

片山全平

北極点へ

まずわたしたちは、犬そり北極点行の植村直己氏と日大隊を祝福しなければならぬ。植村氏は三月五日カナダ最北端エルズミア島エドワード岬から、また日大隊池田錦重隊長ら二十二人は三月十二日同島ヘクラ岬をそれぞれ出発、併走するかたちで北極点に向かった。そして日大隊は四月二十七日、四十七日目、日本人として最初に、また植村氏は四月三十日の五十六日目に到達したものである。これまでの北極点行は、ペアリ(米、一九〇九年)、ハーバード(英、一九六九年)、モンチーノ(伊、一九七一年)の三隊であるが、植村氏の単独犬そり行は世界最初のものであった。

植村氏はさらにグリーンランド犬そり縦断を目指し、五月十二日モーリス・ジュサップを出発、八月二十二日、ナルサスワック北方九〇キロの地点(北緯61度39分、西経44度10分)までの二七〇〇キロを走破、公子夫人と指揮をとっていた当会の西堀栄三郎会長の出迎えを受けたわけである。グリーンランド横断はあるが、縦断は初めての試みであった。

エベレストでの記録

「第三の極点」ともいふべきエベレストは、初登頂以来ことしが二十五周年にあたり、五月二十九日カトマンズでその記念式典が開かれた。このことをメスナーが意識していたとは思えないが、「G A S F R E E」(酸素補給しない)登山に成功した。メスナーを含むオーストリア隊(ウォルフガング・ナイツル隊長ら十一人)は五月三日から四回にわたって九人が頂上に立った。その第二陣として、メスナー、ハーベラーが八日に乗り出した。サウスケルを午前五時十五分出発、頂上到着が午後一時十五分、所要タイム八時間ということになる。二人のコンビは欧州アルプスからヒドン・ピーク北壁初登攀まで、長いコンビの期間もあり、途中、ヒラリー・ステップでアンザイレンしただけという。

酸素使用については、一九七一年、ケラス博士が「アンフェア?」の疑問を投じていたのだが、その使用はエ峰初登頂以来不可欠となった。しかしメスナーは「成功より、まず挑戦のより重要性」を哲学としており、ナンガ・パルバット、マナスル、ヒドン・ピークに実績を積み、今回のエ峰の挑戦となった。このあとメスナーはナンガ・パルバットの単独行にも成功している。

ポストの仏、西独合同隊が十月十四、十五、十六日に分かれて登頂したが、ピエール・マゾー(前仏青少年スポーツ相、四十九歳)はフランス人最初の登頂者となった。彼は一九七一年国際隊に加わり、フランス人一番乗りを目指したが、ディレンファース隊長に反対され、内紛を起こした主謀者。七年越しの執念といえ、そのため歴代登頂者のなかでは最年長者の榮譽を獲得した。



女性の冬季初登攀

さらに第三次隊七人のなかにはポーランドの女性登山家ワンダ・ルトキエビッチも参加していた。これは一九七五年の日本女性隊の田部井淳子さん、中国隊の潘多さんについて三人目の女性。彼女は

き部隊は途中一隊員が凍傷にかかってヘリコプターで救出された。下山が早かったため、ポ隊の方が女性第一号と伝えられたが、これは誤報で、鳴夫妻は下山してワンダさんと確認し合った。

さらにエベレストの記録に付け加えるならば、プレのオーストリア隊の登頂者九人は、インド、中国隊とタイ記録となる。しかし、ポストの仏・西独隊は十四人まで到達するという新記録を樹立した。

ダウラギリ柱状南岩稜

バリエーションの最右翼として評価されているダウラギリ主峰の柱状南ピラーへは東京ヒマラヤ登山隊(雨宮節隊長ら十三人)が挑戦、五月十日、十一日の両日におたつて六人が登頂、三千メートルのピラーの難ルートを克服した。同隊は一九七五年の第一次隊のさい、五人(うちシェルパ三人)の遭難者を出しているが、雨宮隊長らの執念が結実させたもので、第一次の登頂者はプロガイドの重野太肚二、またK2の経験者小林利明、第二次は清水清二、加藤康二、吉野寛にシェルパのアン・カミであった。なお同隊は今回も永沼勝巳隊員を転落事故で失っている。ダウラギリ主峰を取り巻くパリエーションはなお南、西両壁、北西稜などが残されており、若もこの挑戦は今後ともあとを断たないだろう。

K2北東稜

K2では、西稜を目指していた英ポニントン隊が失敗、かわってアメリカ隊(ジム・ウィッテカー隊長ら十三人)が北東稜から初登攀に成功した。

九月六日ジム・ウィックワイヤー、ルー・レイカの両隊員が七九五

○メイトルのC6から登頂した。アメリカ隊とK2とのかかり合いは深く、正式には一九三八年チャールズ・ハウストンを隊長とする第一次隊から第二次(一九三九年)、第三次(一九五三年)と続き、一昨年はポーター問題で支障をきたして、満足な活動もなく引き揚げており、今回の成功は、過去半世紀のあいだ、六回目にもたらされた。

### カラコルムは日本人ばかり

気にかかるのは注目されていた英ポニントン隊のてん末である。六月十二日、西稜に設営されたC2への荷上げが本格化し、ダグ・スコット、ニック・エストコート、ポーターの三人がその任にあたった。急斜面の横断中にエストコートがのまれた。欧州アルプスのスキーツアーで死んだデュガール・ハストンがエベレスト南西壁初登攀しての帰路、この登攀を提起したといわれ、アンナプルナ南壁初登攀以来がっちり組まれていた少数精鋭のポニントン・チームからまた一人欠落していった。この死とともにポニントンは登頂を断念したが、英後援紙には「カラコラムは日本人登山者ばかりだった」と付け加えている。日本隊の活躍がトップ。ネパール、インド、パキスタン三国に限っても四十八隊中、日本隊は三十隊におよび、その成果をあげた。

## 加納一郎氏の著作集刊行について

堂本 曉子

加納一郎氏の著作集を出すことは、去年の秋、「加納一郎氏を偲ぶ会」の時に決った。以来一年、出版方法を模索してきたが、結局、「加納一郎著作集刊行委員会」(代表、西堀栄三郎)が、独自に刊行の運動を起し、自由で理想的な編集による著作集づくりに取り組むことになった。多くの方のご参加を得て、よりよい著作集を出したいものと願っている。

加納さんが亡くなって二、三週間たった頃、湯島の旧ルームで山崎安治さんに会った。先月の会報に山崎さん自身が書いておられるように、山崎さんが会報の編集をしていた時、加納さんは札幌から校正の間違いを指摘し、あげくは「こんな誤植の多い会報は止めてしまえ」と、激しい手紙まで送られたという。しかしいまや、山崎さんにとって当時の苦々しい経験が、逆になつかしい思い出になっていくようである。「加納さんが訳したチェリイ・ガラードの『世界最悪の旅』は後世に残る名訳だ。エバンスが死ぬくだりになると何度読んでも泣いてしまう。その後、抄訳は数多く出ているが、あの文章の味は戦時中に出た全訳で読まなければわからない」と山崎さんは力説する。私は抄訳しか読んでおらず、全訳は本さえたことがなかった。山崎さんの思いつきで「偲ぶ会」の時には、遺影の前に「世界最悪の旅」の原書と訳本を置くことになった。

原書はご家族のところになく、夏の終りに、札幌の北大低温研の書庫で見つけた。書き込み一つなく、実にきれいな本だったが、写真については、加納さんの字で訳本に入れるか否かのメモがあり、翻訳に使った本だとわかった。

低温研の帰りに伺った北大山岳部の橋本誠二さんのお宅で、私は初めて分厚い全訳本を見せていただいた。かつて、担任教授の橋本さんのところへ一人の学生が「生きる望みを失いました」と自殺を予告に来たそうである。その時、橋本さんは「死ぬ前に

一冊だけ読んで欲しい本がある」と、この「世界最悪の旅」を渡したところ、一週間程して学生は、「死ぬのは止めました」と恥し気に言って本を返しに来たという。今、その学生は北大で助教授になつていくとのことだった。

「加納一郎氏を偲ぶ会」の前日、京都の学生から電話があった。「加納さんとは一面識もありませんが、加納さんの本から影響を受けました。会に出てもいいでしょうか」という問い合せである。翌日、彼は上京してきて国際文化会館での会に出席した。ある人が、「誰にでも好かれていた人の追悼会は平凡だけど、加納さんのように思うことを歯に衣を着せずと言って生きてきた人は、敵も多いかわりに、追悼会は活気があって面白いに違いない」と言った。その通りだった。意固地さ故の逸話や笑い話、その裏返しややさしさ、そして何より権力を嫌い、反骨の人であればこそ、若者たちに人気があったことを、加納さんと親しかった人たちの追悼の言葉から知った。「加納さんが好きだったから」と若者たちは肩を組んで寮歌を歌った。七十八歳の老人を「偲ぶ会」というより若者の追悼会の方がよかった。

私は、十年前に西堀会長のご紹介で加納さんを知った。「加納さんは極地を知らない。古稀の祝いに皆で北極散歩の旅を計画している。ステッキ役で同行しないか」との話だった。ステッキ役は実現しなかったが、以来札幌へ行くこと加納さんのお宅へうかがうようになった。極地やヒマラヤの話となると加納さんは目を輝やかし、信念が力強い言葉になって後から後からあふれ出るようであった。相手を引き込まずにはおかない不思議な魅力で話をされた。本も同じである。著作集の準備をしながら、今も、加納さんの本が、未知を求める若者たちの心に語りかけていることを感じた。

終戦後に出た「極地を探る人々」という子供のための本がある。やさしく、短い文章で書かれているにもかかわらず、一人一人の探検家が実に個性的で、読んでいるとスコットやバードやアムンゼンに出会うような楽しさがあった。ある時「加納さんの本の中で『極地を探る人々』が一番好きです」と言うとき、加納さん



図書  
紹介

未踏のパミール

クルィレンコ著  
田村俊介訳

ソ連領パミールは、外人にその門戸が開かれ、一九七六年の日本山岳会、パミール登山隊をはじめ数隊が入山して成果をあげて以来、私たちにも身近に感じられるようになった。「未踏のパミール」は、四十年ほど前のパミールの探検の記録であるが、あまり文献のないパミールを知る上で貴重なものといえよう。袋一平氏亡きあとソ連の登山の紹介者、研究者として活躍しておられる訳者による的確な訳と、最新の知識による訳注は、パミールの事情にうとい者にとって有難いことである。

一九二八年から一九三四年の間にクルィレンコはパミールに六回の遠征を試みた。一九三四年の遠征隊は、アパラコフ班がレーニン峰に登頂し、この一連の遠征の最後を飾った。本書はそのうちの

は「あなたもそうですか。私も実はあの本が一番好きなんですよ」と言われ、私の方が逆に驚いた。「極地を探る人々」は再版されていないので、今では、古本屋で見ることすらない。しかしいつの時代でも子供たちに読ませたい本である。加納さんが亡くなって一年余り、ますます著作集を出すことの意義の大きさを思うようになった。

極地生活のおくの問題とその答とがここに二十五人の探検家によって身をもって示されている。

この人たちはまた探検とは豊かな心性と高い教養とすぐれた機略を必要とする困難な仕事であるとともに人類の文化史に名をとどめる貴重な事業であることを物語ってくれるであらう。

加納 一郎

「未踏への誘惑——二十五人の極地探検家——」の巻頭の一文である。

著作集刊行の方法については、本多勝一氏の「貧困なる精神」第八集から一部を転載させていただく。

加納さんが亡くなってまもない去年の九月中旬、加納さんへの尽きぬ想いの有志が東京で「加納一郎氏を偲ぶ会」(代表、西堀栄三郎日本山岳会長)を開いた。(関西でもこれより一足さきに開かれている。)国際文化会館での夕食会に集まった有志は、北海道や四国からの方々を含めて八十数人に達した。このときの提案のひとつに、加納一郎著作集の刊行がある。具体的な方法はまだ何も進められていなかったが、とりあえずこの機会に提案だけされたものであった。

以後、「偲ぶ会」の中で比較的マスコミ界に関係の深い者が方法について検討してきた。故人との因縁から一応朝日新聞出版局を打診したが、これは実現しなかった。いくつかの曲折の後、有志による運動として刊行する方針をかためた。すなわち、目標を二千部として予約者(運動参加者)を募集し、目標達成と同時に編集にとりかかり、予約者だけに配本する方法である。これにはすでに成功の前例もあり、次の点ですぐれてい

る。

①相対的に安い値段で良い本が入手できること。②目標達成を見定めてスタートするので、資金的に全く不安がない。③目標を越えた場合、それだけさらに本が充実する(増頁あるいは別冊増刊など)。

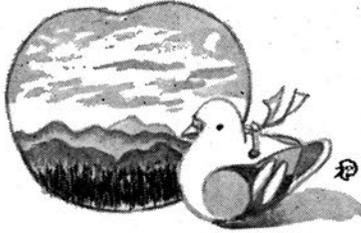
ここに拙文を寄せたのは、読者の中にこの運動に加わっていただける方があれば有難いと思ったからである。加納さんの著作活動での業績は大きくわけて三つあり、その第一は探検記の翻訳、第二は極地を中心とする探検史の研究と啓蒙、第三は「雪と氷」にみられるような雪氷学界への貢献であろう。これらの中には、きわめて貴重でありながら現在入手できないものも多い。たとえばチェリー・ガラードの「世界最悪の旅」(スコット隊の南極探検・遭難の記録)は、各種のノンフィクション全集に抄訳がとりあげられているものの、その全訳は戦争中に一度出て絶版になったまま未だに再刊されていない。これは加納さんの名訳として有名だが、全訳版を持っている人はたいへん少ないであろう。また極地探検史を、加納さんほど情熱的に、読む人が若者なら探検家になりたくならずはおかぬほどの説得力をもって書いた人はいないだろう。体をこわして自身では活動できなかった加納さんは、ペンによって日本人を極地へ煽動したのであった。極地のあけぼのを日本語によって正しくとらえることができるのは、加納さんの力によるところが最も大きいだろう。古典の名にふさわしいものである。

著作集は右の「三つの分野」のうち第一と第二に重点を置き、未刊の随筆集も含めて五巻前後(二段組み四百頁くらい)を予定している。くわしい内容や値段・方法などが決まり次第お知らせしたいので、参加(予約)を希望される方々は左記へハガキで住所氏名を登録しておいていただきたい。これは、詳細決定後改めて案内状をお送りするためのものなので、これによって予約したことを意味するわけではない。

〒113 東京都文京区本郷五―二九―一三 赤門アピタシオン  
一〇〇三 加納一郎著作集刊行委員会(代表・西堀栄三郎)

五回目までの遠征の中心人物だったクルイレンコの手記をもとに四人の編集委員によりまとめられたものである。

クルイレンコの隊は一九二八年にはフエドチェンコ氷河を広く歩き、一九二九年にはザアライ山脈を南から北へ越えた。一九三一年から三年間続いた探検では「ガルモの接合点」と呼ばれた未踏査地域、ダルワス山脈の高山地帯の総



合調査を行った。これらの記録がエピソードをまじえながら綴られている。次々と未知を解決して行く手法はアルピニストと探検家の両資質をもったクルイレンコ独特のものであり、その記述もまた客観性に富み、学術的でさえある。非常に行きつまった状況下にもかかわらず、クルイレンコの筆は冷静である。例えば第3部「ガルモの接合点」の中に次のような文章

がある。サグラン氷河からペーシイ峠へむかう途中、食糧が欠乏していたときのことである。

「ドローフェフのグループはここ数日間、粗食に耐えていた。そして今や彼らの食糧は全く底をついていた。彼らは大麦のレピョーシカ一枚、缶詰二個、砂糖二塊が残されているだけである。」(本書二十二ページ)。このような簡潔で、しかし、それでいて訴える力のある文章からクルイレンコの研えた目を感じる。

クルイレンコは激しい政治活動をし、後には検事となって政治犯

### チセヌプリから目国内岳へ

井手 貢夫

昨年の十一月三日にチセハウスからチセヌプリの鞍部を通ってシヤクナゲ岳(一〇四八m)と白樺山(九二二m)を越えて新見温泉まで歩いたことがあった。前日の午後、みぞれまじりの雪についてチセヌプリ(一一三四・五m)の頂上まで行って来たが、この日は綺麗に晴れて、ただ前夜来の雪が二、三十センチばかり積っているのを踏んで歩いた。前の日も先に立って案内してくれたチセハウスのキクちゃんという雌犬が、今度

は雄犬を連れて来て、二匹で雪の上に足あとをつけながら先行してくれて随分助かった。山川さんと私と二人だけで、ほかに人の子一人見えず、風こそ冷たかったが、美しく晴れた晩秋初冬の山のよさがしみじみと味わえて、岩内の町や海を見おろす眺めも申し分なく、今度はここをスキーで越えたいと思った。それに

行手の奥にそびえる目国内岳(一一二〇二・六m)がこちら側から見ると岩峰を連ねてじつに立派である。余勢をかってこれも登りたいものだと思った。しかし冬に年寄りの一人歩きはさすがに多少の不安もあって、若い人三、四人を語らっていたが、ようやく五月四日にその思いを果すことができた。今年四月から五月初めにかけて天候が定まらず、一日、二日は曇ったり、しぐれたりしたが、出発日の三日は運よく晴れ上がった。しかしひどい風で寒い。チセハウスに車が近づく頃またしくれたがそのあとは完全に晴れ上がった。ただ山々の西側の斜面がどの山も例外なく黒々と這松を見せているので、多少スキーを運んだり、藪をくぐったりしなくてはなるまいかと心配したが、実際に行ってみるとシヤクナゲ岳に続く小さな尾根を越えるときに3mも運んだだけで、あとはすべてスキーで行けた。雪もしまっていていくつかの適度の斜面をじつに思いのままに滑ることができ、最後には美しい白樺の樹林の間を楽しく滑降することができた。目国内岳は前目国内岳への登りと白樺の林があるが、それを越えると三キロ余りが全く真白な雪の大斜面である。風がひどかったのとシールが切れそうになったので私は前目国内岳の頂上だけでやめたが、若い人達はそこから一時間余りで往復して来た。

前目国内から逆光の中の本峰を見ると、長い平らな尾根をたてに見る形になるので割に急峻に見えるが、ちょっとニセソツを連想した位だが、もちろん大違いで、若い人達はザラメ雪の上を快適に飛ばして来た。

この日出会ったほかのパーティーはシヤクナゲ岳で北側に三人の一人組、南側に五人の一人組、白樺岳で三人の一人組、目国内岳は我々五人だけだった。その日は夕方新見温泉にとまって、翌五日は帰りがけにニセコアンヌプリスキー場からリフトを利用して頂上に往復して来たが、これは昔の狩太尾根で、美しかった樹林がほとんど切られてしまっていた。このあたりのゲ



●図書受入報告

図書委員会

洋書 (昭和52年12月～53年2月)  
購入分 (2)

- |  |   |  |
|--|---|--|
| <p>36. M. Pereira, "Across the Caucasus", Geoffrey Bles, Essex, 1973</p> <p>37. P. Pirie, "Kashmir - The Land of Streams &amp; Solitudes", John Lane, London/New York</p> <p>38. G. Rebuffat, "Starlight and Storm", J.M. Dent &amp; Sons, London, 1956</p> <p>39. G. Rebuffat, "Neige et Roc", Hachette, Paris, 1959</p> <p>40. C. Richard, "Climbing Blind", Hodder &amp; Stoughton, London, 1966</p> <p>41. M. Romm, "The Ascent of Mount Sutarlin", Lowrence &amp; Wishart, London, 1936</p> <p>42. M. Slessor, "The Andes are Prickly", V. Gollancz, London, 1966</p> <p>43. M. Slessor, "Red Peak", Hodder &amp; Stoughton, London, 1964</p> <p>44. F.S. Smythe, "The Mountain Top", The St. Hugh's Press., 1947</p> <p>45. F.S. Smythe, "Again Switzerland", Hodder &amp; Stoughton, London, 1947</p> <p>46. F.S. Smythe, "Mountaineering Holiday", Hodder &amp; Stoughton,</p> | <p>London, 1950</p> <p>47. F.S. Smythe, "Over Tylolese Hills", Hodder &amp; Stoughton, London, 1936</p> <p>48. F.S. Smythe, "Camp Six", Hodder &amp; Stoughton. London, 1937</p> <p>49. F.S. Smythe, "The Adventures of a Mountaineer", J.M. Dent &amp; Sons, London, 1940</p> <p>50. F.S. Smythe, "British Mountaineers", Britain Pictures Publishers, London, 1938</p> <p>51. F.S. Smythe, "Climbs in the Canadian Rockies", Hodder &amp; Stoughton, London, 1950</p> <p>52. S. Snaith, "At Grips with Everest", The Percy Press., London, 1937</p> <p>53. S. Snaith, "At Grips with Everest", The Percy Press., London, 1945</p> <p>54. T.H. Somervell, "After Everest", Hodder &amp; Stoughton, London, 1947</p> <p>55. C. Stonor, "The Sherpa and the Snowman", Hollis &amp; Charter, London, 1955</p> <p>56. H.E.G. Tyndale, "Mountain Paths", Eyre &amp; Spottiswoode, London, 1948</p> <p>57. J.R. Ullman, "The Sand of Karakorum", St. James's Place, 1953</p> <p>58. W. Unsworth, "The Book of Rock Climbing", Arther Barker,</p> | <p>London, 1974</p> <p>59. M. Ward, "In this Short Span, A Mountaineering Memoir", V. Gollancz, London, 1972</p> <p>60. T. Weir, "The Ultimate Mountains", Cassel &amp; Co., 1953</p> <p>61. J.H. Williams, "Yosemite and Its High Sierra", J.H. Williams, Tacoma &amp; San Fransisco, 1914</p> <p>62. T. Weir, "East of Katmandu", ?, ?, ?</p> <p>63. G.W. Young, "The Grace of Forgetting", Country Life, London, 1953</p> <p>64. F. Younghusband, "Everest: The Challenge", T. Nelson &amp; Sons, 1944</p> <p>65. J. Mitchell, "Guide book to Mt. Kenya", The Mountain Club of Kenya 1971</p> <p>66. 外交出版社, "Another Ascent of the World's Highest Peak" 北京 1975 (西堀栄三郎氏寄贈)</p> <p>67. "La Chine", 人民画報, 北京, 1977 (西堀氏寄贈)</p> <p>68. 外交出版社, "再次登上珠穆朗瑪峰" 北京, 1975 (中国登山協会寄贈)</p> <p>69. 中国希夏邦馬峰科学考察隊編, "希夏邦馬峰・科学考察图片集", (中国登山協会寄贈)</p> |
|--|---|--|

\* \* \*

●海外だより

国際山岳映画祭

27回目をむかえたトレント国際山岳探検映画祭に続いて、この秋から冬にかけて三つの映画祭が催される。これら映画祭は毎年定期的に開かれるので、出品希望者は海外連絡委員会に連絡されたい。

・第9回レ・ディアブル山岳映画祭は、スイスのレ・ディアブルで9月13日から17日まで5日間 にわたって開かれた。

・第3回バンフ山岳映画祭は、カナダ山岳会主催でカナダ、アルバートのバンフで10月20日から22日に開かれ、その内の優秀作品は11月4日、バンフセンターのエリック・ハーヴィック劇場で一般公開される。

・第2回ラ・プラーニュ国際冒険映画祭は12月14日から17日までフランスのサヴォア県ラ・プラーニュで開かれる。

UIAA総会開催

一九七八年UIAA (国際山岳連盟) 総会は、ギリシアのアテネで10月19日に開催され、本会々員丹部節夫氏 (日山協副会長) が出席した。

オーストリア山岳クラブ

百年記念祭

オーストリア山岳クラブは一〇

〇年記念祭を12月6、7日にウィーンで開催する。本会に対し招待状が来たが日程は次の通りである。

12月6日、17時、ウィーン、グラーベン貯蓄銀行ホールで記念祝典が開かれる。20時、ウィーン大学講堂でハンス・シェル氏による記念講演「ヒドゥン・ピーク、ナンガ・パルバット、エヴェレストーハ〇〇〇メートル峰登攀者達の光と影」

12月7日、12時30分、ウィーン市長、レオポルド・グラーツ氏主催による昼食会。19時30分、アウエルスベルグ宮殿での祝典。会長カール・リント博士の挨拶、来賓エーリッヒ・ラックナー氏による祝辞。音楽。

なお、オーストリア山岳クラブ一〇〇年を記念して記念切手 (四シリング) が発表されるが希望者は会の事務局まで申込まれたし。

UIAA (国際山岳連盟)

前会長、ジャン・ジュジ  
教授死去

本会もメンバーになって一〇UIAAの前会長 (一九七二年―一九七五年) ジャン・ジュジ教授はマッターホルン北壁登攀中、ヘルンリ稜直下の、もう少しで完登というところで暴風雨にあい、8月8日遭難死した。ジュジ氏は、ヒ

鈴木郭之



### 植村直己氏に菊池寛賞

北極点単独到達、グリーンランド縦断と、いずれも世界で初めての記録を達成した植村直己氏(別項「一九七八年、海外の記録」参照)に、先ごろ菊池寛賞がおくられました。川喜田二郎氏の秩父宮記念学術賞、近藤信行氏の大佛次郎賞など、今年には会員の受賞が大にぎわいでした。

なお、植村氏の北極行をプロモートした電通には、その後、自薦他薦で、さまざまな冒険、探検(まがい)の企画がもちこまれていたとのこと。

### 今西前会長一千山登頂

今西錦司前会長は、八月十三日奈良大峰山系の釈迦ヶ岳(一八〇〇メートル)に登り、一〇〇〇山登頂を達成。中学時代から始まって六十年、探検と登山の輝かしい経歴に一つの節目をつけられました。

また、九月下旬には、京都で一〇〇〇山登頂を祝う会が開か

れましたが、その時はすでに一〇〇〇山になっていた由。

なお、会報三七九号(一九七七年一月号)でご承知のとおり静岡の石間信夫氏は、すでに一五〇〇回山行を記録されています。

### ネパールに時計を

ネパールに時計を贈る運動にご協力ください。日本ネパール協会鳥取支部では、ネパールとインドの国境の町ビルガンジに建てられた時計塔に日本製の時計をセットすることにし、いま基金を募集しています。要する費用はおよそ五〇〇万円、さらに岩村昇博士への医療援助も企画にのぼっています。

### 九

日本ネパール協会鳥取支部  
〒六八九一三四 TEL〇八五九五六―二〇一六  
振込銀行口座 鳥取銀行米子支店普通預金〇八八〇五  
古はがき二通  
昭和十七年九月十九日杉並局  
消印  
拜啓

ヒマラヤ山岳文献抄第一刷、お贈り下され、難有拝受。私の知らぬ文献なかく多く、享

益いたし候 御礼まで  
九月十九日  
東京阿佐ヶ谷三ノ五〇〇  
小島久太

昭和十八年二月十二日  
杉並局消印  
ヒマラヤ山岳文献抄(二)お送り下さいましてありがとうございました。存じます。

要領を得た小解を読むだけでも種々な联想が起つて興味津々、フレッシュフィールドのそれなど同感。同氏やスエン・ヘディングには、私が親しく遇つてゐるだけ、また佛を彷彿されます。二月十二日 (住所 前出の通り)

当時のがきは式銭、大楠公像と野木將軍肖像です。宛名  
大阪市此花区春日出町北港  
住宅、一三〇の二、大浜氏方  
諏訪多栄蔵

(注)もし小島軍太郎さんが、この古はがき、ほしいとおっしゃれば、藤沢市の方へお送りしますほかの方にはあげません。(田中栄蔵)

### 上高地山研だより

徳高の山々に新雪がくる頃、会員皆さまの憩の場と親しまれてきた山研は昨年度より一週間

マラヤ遠征では、チャー・オユの西峰に登頂したのを始め、故郷のスイスでは、アイガーの北壁、グラインド・ジョラスの北壁やドリユのボナッティ・ピラー等数々の輝ける登攀の足跡をのこした。また、体育学の教授として、ザイルの強度に対し、長年研究並びに実験を重ね、その成果をあげた。ガストン・レビュファの映画「星にのぼされたザイル」ではシャモニ針峰群をレビュファとザイルを組んで若者顔負けの元気さで登っていたのを憶えていられるだろう。享年七十歳。慎しんで御冥福を祈る。

### 北海道支部だより

札幌で講演のため来道された西堀会長を迎えて、9月17日(日)午後6時より札幌駅前通り雪印パーラーで談話会を開いた。会長のお話しの中には支部活動の活発な?北海道支部にはじまり、ペテガリ岳、植村直己氏のグリーンランド遠征等の話に和気あいあい。焼トウキビ、茹でじゃがいも、パイラー特製アイスクリームと北海道の味も登場にビール、ジョニ黒が早々に空いてしまう。

翌18日は日本生命ビル8階講堂に一千人の聴衆を前に「日本人の創造性」と題し時間オーバーをすの張り切り西堀会長の札幌での活躍の一コマでした。  
〔出席者氏名〕 浅利欣吉、平野

明、横田春雄、長沢光和、金井五郎、高沢光雄、新妻徹、山川力、萩谷三枝子、大塚武、秦巖夫、松沢節夫、朝比奈英三、佐々保雄、柳田涼子、赤石喜恵子、石井忠雅  
・お知らせ

### 年次晩餐会12月2日

今年度の年次晩餐会は12月2日(土)午後6時より昨年と同じく東京・新宿の京王プラザホテルでおこなわれます。ご出席をお待ちしています。

### 会員名簿配布

ようやく会員名簿ができ上り会員各位にご送付しましたが、一部脱落や誤りなど校正もれがありまして、ご迷惑をおかけしたところもあると思います。お気付きの点は事務局までご連絡願います。名簿の正確を期するため、住所等の変更があった場合には、至急ご連絡下さい。 理事会

### 忘年会は12月14日

恒例の忘年会(集会委員会・婦人懇談会共催)を左記によりひらきます。

日時 12月14日(木)午後6時  
場所 日本山岳会ルーム  
会費 一〇〇〇円  
御出席の方はプレゼント(アイディアのある三〇〇円程度のもの)に手紙をそえてご用意下さい。

東西南北

●52年度・53年度利用者対比

	52年度	53年度
4, 5月	63名(会員23名)	44名(会員25名)
6月	95名(会員34名)	89名(会員32名)
7月	99名(会員24名)	144名(会員40名)
8月	268名(会員74名)	205名(会員42名)
9月	130名(会員61名)	151名(会員83名)
10月	121名(会員41名)	
11月	34名(会員16名)	

おくれの十一月十二日(日)に閉所しました。ご利用くださいました皆さまにお礼を申しあげると共に、来年度もお誘い合せの上、ご利用くださいますようお願いいたします。

開設五年目、皆さまのご協力と管理人津村夫妻の温かい心づくしのおかげで、日本山岳会らしい、落着いた、あったかいムードができあがってきたような気がいたします。

ただ、大変残念なことに、無責任なキャンセルが多いことです。山研は会員皆さまのものです。独立採算の目標も、皆さまの協力なしには達成することはできません。重ねてご協力をお願いいたします。(小倉董子)

桂の木  
山荘の庭の桂の木

春から夏へ 夏から秋へと 移りゆく  
物言わぬ木に 朝な夕なに 語りかけ  
話し合うた桂の木  
穂高の山が色付くと  
冷たい風が吹いて来る  
もうすぐお別れね?  
風もないのに  
色付いた木の葉が落ちてくる  
津村はるの(山研管理人作  
あすをひらく、新しい老人」  
掲載 抜粋



奥秩父・金峰山小屋

かつて奥秩父を愛好された古い先輩会員と、金峰山(二五九五メートル)が話題となったとき、山頂直下の金峰山小屋のことをご存知ない方が多い。この小屋については会編集の『山日記』にも、市販のガイドブックにも記載されているが、若干紹介してみたい。

小屋の位置は五万分の一金峰山地図で、三角点より北に四〇

〇メートル下った露岩記号のあるところである。これは薬師岩と呼ばれるもので、二四四〇メートル、森林限界地点となっている。川上村(長野県南佐久郡)が国庫補助を受け、昭和三十五年に建設したもので、ブロック造り二階建、一二〇名収容の立派なものである。管理人常任期間は四月下旬〜十一月下旬、十二月下旬〜一月上旬で、期間外は開放される。林袈裟夫、林香両氏が一週間交替で管理に当たっている。

北側からの道は甲斐国志信州口一筋と記された古道で、増富口に比べアプローチが長いせいか登山者が割合少なく、静かである。

このアプローチの長さをいとななければタクシー利用で川端下を経て廻目平(村営金峰山荘あり、無人、明年度国民宿舎となる予定)まで入れるので、ここから小屋まで三〜四時間、早朝新宿を発つと夕方までには十分小屋に入ることが出来る。また増富口に比べ労力がかかるに少ない。奥秩父では最高地点の小屋であり、北側の展望は雄大である。会員の皆様のご利用をおすすめしたい。

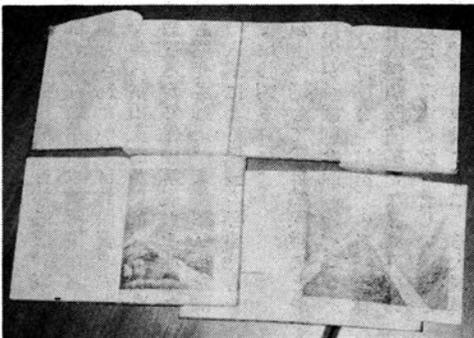
なお詳細は〇二六七九一九一 二一五八 林袈裟夫宅に照会された。(高田真哉)

東西南北

日本山岳会図書室ニュース

ソーシュールの  
『アルプスの旅』を入手  
近代登山の幕明けが、ド・ソーシュールの企画・後援によるバルマとパカールのモン・ブラン登頂であることは広く知られています。一七六八年八月のことです。当のソーシュール自身も、一七六九年にはモン・ブランの第二登をおこないました。

この近代登山の父ともいえるソーシュール(Horace Benedict de Saussure)は、一七四〇年、ジュネーヴ近郊のコンシュに生れた自然科学者ですが、アルプス山麓をめぐる旅や登山を何回もおこな、科学的な透徹した眼で自然を



『アルプスの旅』初版本

観察、描写し、暗黒の中世の呪縛から山を解き放つのに大きな貢献をしました。その成果は『アルプスの旅』全四巻にまとめられていますが、第一巻が一七七九年に、第四巻が一七九六年に出版されたこの本は、いまではヨーロッパでも稀覯本になっています。日本山岳会図書室では、この世界的珍本を今秋入手しましたのでご報告します。

昨年の夏、スイス・ジュネーヴの画廊 Galerie Grand'rue にこの本があるとの情報を近藤等氏から得た図書委員会では、検討を重ねた末、図書室の整備、充実をはかるため入手を希望、理事会の承認を得て、今夏所用でスイスを訪れた会員岡沢祐吉氏が購入、持帰ったものです。日本には、早稲田大学図書館に一揃いあるとのことですが、他はまだ確認していません。早大図書館も閲覧には特別許可を必要とする貴重本扱いにしている由ですが、当会でも、管理、閲覧の方法を検討中です。

抄訳は、『世界山岳全集第一巻(朋文堂刊)』として二十年近く前に刊行されていますが、いざしれ機会があれば内容をご紹介いたします。(図書委員会)

### 第四回上高地集會

「やたらに開発に反対するのではなく、やたらな開発に反対する」

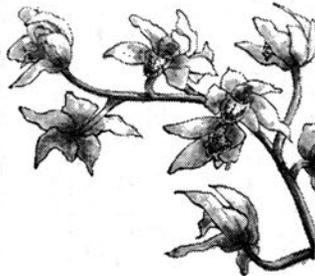
小倉 厚

さる九月九日(土)上高地西糸屋において、日本山岳会自然保護委員会主催の第四回上高地集會が開催された。今回の集會は自然保護関係者のみならず自然保護に関心のある人を対象にして行われたため、北は北海道、南は熊本と全国各地より五〇名にのぼる多数の参加者があった。なお、本部よりは三田元会長、折井副会長、渡辺公平、金坂一郎氏ほか自然保護委員らが出席した。

この集會はいわゆる懇談會のかたちで開催したため、日頃あまり聞かれない各界各層の人々の問題提起があったため極めて活発な討論となり実に延々四時間わたる熱気を帯びたものとなった。

さらに翌十日(日)には自然保護の啓蒙運動とPRを兼ねて恒例の岳沢クリーン作戦が展開された。参加者総数三十二名。各自「上高地を美しくする会」のビニール袋をさげ、山研を朝七時に出発。当日はあいにくの雨であったが、雨中をいとわず

まず、山のゴミの問題。これは全支部にわたる問題で、最近山はかつての一時期にくらぶるとかなりきれいにはなったが、なお冬山における大学、社会人山岳部などのベテランによるゴミの残置や一部地元の新聞に掲載された本格的なクライマーによる奥又白、三ノ窓の汚染のひどさが報告され問題視された。その他、海外における登山隊のゴミ処理についても真剣に討議



また、山の本長三委員長、渡辺公平日山協会のあと、三田元会長の講話、佐々北大名誉教授より先般開催された日米民間環境會議の報告などがあり、地元奥原信濃支部長の歓迎の辞、ついで自然保護と開発の調和を強調して折井副会長の音頭で一同意杯した。

その後全員による自己紹介、懇談會がひき続き開催された。今回の懇談會では、自然保護問題の重要性がとみにたかまわっている現在の世相を反映し、提起される問題は極めて多岐にわたった。

による比良山群の自然破壊、東海支部の御在所岳の水質汚染なども問題とされたが、自然保護の先進県である富山支部からは、富山県における自然保護解説員の活躍なども紹介された。また滅び行く湿原の人工による保護の必要性も一方では強調された。

以上に増して、自然保護にとつて重大かつ深刻な問題が二つある。そのひとつは南アのスパール林道や水俣病門前払いなどにみられる最近の環境行政の著しい後退とダム、林道建設などによる大規模な自然破壊とそれら工事に伴う行政による予算の無駄使いである。前者については山岳会などが大いに歯止めになる必要がある。後者については「やたらに開発に反対する」というシエラ・クラブの新しいスローガンに見られる通りアメリカでも重大関心事であるが、果せるかなこの集會でもこの「開発と自然保護の限界と範囲について」一大論争に発展し、人類滅亡論まで登場して地球、全人類レベルの高次元のものとなった。

また具体的な各支部の問題としては、大峰、大台ヶ原における森林保護や観光道路による自然破壊について奈良支部より、また滋賀支部では国体による小屋建設、それに伴う道路工事

集會終了後、佐々北大名誉教授が「これが本場の民間環境會議だ」との感想を語ったのが印象的であった。

なお、恒例ではないが、今回は特に集會に先きだち、八日から九日にかけて記念山行として徳本峠越えが行われた。幸い両日とも晴天に恵まれ、三田元会長、折井副会長ら十二名が参加した。昔ながらの岩魚留の小屋に一泊、翌九日自然の残されたままの美しい登山道を辿り、正午前に徳本峠に立った。本年七十八歳の三田元会長はこの山行が実に五十五年ぶりの峠越えであったと、感慨深そうであった。

〔参加者〕(順不同) 大野俊夫、宮下啓三、渡辺公平、折井健一、渡辺正臣、金坂一郎、林秀樹、片岡博、工藤文昭、鈴木郭之、関塚貞亨、山崎健、三田幸夫、小倉厚砂田定夫、武田満子、田村聡明、片岡浜子、谷久光、百瀬一茂、山本良三、小林茂、蒲生明登、加藤隆、中村純二、中村あや、佐々保雄、森谷虎彦、木名瀬亘、湯淺道男、内ヶ島吉広、野島福三郎、大沢権貞、百武充、権藤太郎、権藤広子、奥原教永、菊地俊明、吉原龍介、池田智津子、小木尊章男、坂本正智、杉田高行、他会員紹介者七名総計五〇名。

会務報告

9月理事会

9月11日午後6時30分

本会ルーム

▽出席者 西堀会長、望月、折井各副会長、高遠、小倉、中川、橋本、大森(久)、鈴木、黒石、田村、牧野内、嵯峨野各理事、片岡監事、浜野、山崎、小原各評議員

委任 宮下、大森(薫)、越田、浅田各理事、近藤評議員、中島委員

▽議案

・一九五三年度UIAA総会出席代表の件 (鈴木) 承認  
丹部節雄評議員を代表とする

・群馬県太田市の木暮理太郎氏生誕地で木暮氏の記念碑を建設するので、日本山岳会会長に碑文を書いて欲しいとの要請あり (折井) 了承

・科学研究委員会設置提案 (西堀) 了承

▽報告事項

・自然保護 (鈴木)

日米環境会議終了

9月9日、10日自然保護集会 (上高地)

・海外 (西堀)

日中合同登山促進のための文書

を来日中の中国体協代表団長に届けた

・図書 (山崎)

10月21日 図書交換会

12月2日 この一本展 (小倉)

・山研 (小倉)

連絡なしで予約取消しがあるの  
で注意された

・青年懇談会 (橋本)

ドイツより交流登山に8月14日  
4名来日、各地での交歓ができた、ドイツ側では継続希望

・高所登山 (田村)

11月11日 高所登山研究会開催

・集会 (中川)

9月19日 山の歌教室

10月28日 ノミの市

11月(期日未定) 現地小集会

12月17日 もちつき

1月13日、15日 スキー懇親会

ルーム日誌 (8月)

1日(火) 集委員会

3日(木) エーデルワイスクラブ

9日(水) 婦人懇談会研究会

10日(木) ビールパーティー準備会

19日(土) ビールパーティー

22日(火) 高所登山委員会

24日(木) 婦人懇談会研究会

会員移動

物故

九七五 四谷竜胤氏(53・8・29)

今月の来室者三一四名

第三七六回小集会

もちつき大会

早くも年の瀬が近づき、あわただしくなってきました。今年も恒例の「もちつき大会」を盛大におこないます。ルームに飾る鏡もちをつくり、新年を迎えるよう楽しいひとときをお過ごし下さい。

日時 12月17日(日) 11時～14時

場所 東京世田谷区太子堂四一

一一 教学院(東急玉川線三軒茶屋下車)

会費 会員 一〇〇〇円 非会員 一〇〇〇円 小人 五〇〇円

パミール・カフカス

入山案内

一九七九年度パミール・カフカス入山案内がソ連山岳連盟より届いています。入山希望者は事務局にてお受取り下さい。エントリは12月末です。(高所登山委員会) 編集からV三五一号から四〇〇号までの総目次を別冊として作成しました。ご利用下さい。

昭和五十三年十一月二十日発行  
102 東京都千代田区四番町五一四  
サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会  
発行人 西堀栄三郎

編集代表 大森 久雄  
電話東京(03) 四四三三  
振替口座東京三一四八二九番  
東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

お知らせ